

第13期県民生活審議会 第2回県民生活部会

1. 日 時 令和3年6月25日（金）13：30～15：30
2. 場 所 ひょうご女性交流館5階501会議室
3. 出席者 委員：鳥越会長、小西部会長、勝沼委員、実吉委員、高岸委員、竹内委員、友藤委員、服部委員、飛田委員、星委員、山下委員、吉岡委員
特別委員：追手門学院大学足立教授、大手前大学谷村准教授
県側：城県民生活部長、高永県民生活局長、岩原県民生活課長、大西参画協働・ボランティア活動支援班長

4. 議 事

[報告事項] 令和2年度 参画と協働関連施策の年次報告について

[協議事項] ポストコロナ社会における新たな生活スタイルについて（調査研究結果）

5. 主な内容

【令和2年度 参画と協働関連施策の年次報告について】

○資料の記載内容

*「ひょうごボランティアプラザや中間支援団体での活動相談」の説明について、ひょうごボランティアプラザが主語になっており、相談対応をしているのがプラザだけのように読めてしまうので、表現を変えた方がいいと思う。

○県民交流広場事業

*この事業の実施に際し、県は「地域コミュニティの広場を作っていく」ということを言い続けた。そして、とてもよい評価を得ている。そうした精神を忘れず、引き続きがんばっていただきたい。

○NPOの位置づけ

*協働という「行政と一緒に考えて地域のことを一緒にやっていく」ということが、15年前、20年前ぐらいから比べるとその感覚が薄れてしまっている。NPOというものが成果を出すために使う道具のような位置づけになっていると強く感じる。

【ポストコロナ社会における新たな生活スタイルについて】

○ポストコロナの定義

*ポストコロナ社会という言葉は使う人によって内容が違う可能性があるので、ちゃんと定義づけをした上で議論をする必要がある。

○県民アンケート調査研究

- * ウェブではなく郵送による調査を行えたので、普段発言する機会の少ない人の声まで拾えているところが特色である。
- * 結果について、コロナ禍前の同様の調査と比較しているわけではないので、「コロナだから変わった」とはいえない数字が結構あると感じた。
- * 令和2年11月～12月にアンケートを実施したが、この時期はコロナの感染が比較的落ち着いているタイミングであった。コロナが猛威をふるっていると、もっとネガティブな結果になったものと思う。
- * この結果から地域性も見る事が可能となっている。例えば、テレワークなどは地域差がはっきりと出ており、神戸・阪神北・阪神南は高い数字が出ているが、但馬や北播磨地域になると極めて低くなっている。

○緊急事態宣言下での地域活動

- * 報告書では「地域自治組織の活動が停止してシステムが機能不全状態になった」とされているが、こうした中でも「つながり続けること」を優先して、電話での連絡や相談室の運営、フードバンクへの食品の提供などの活動を続けている団体が5、6割程度あったので、本当にそう言い切れるのか疑問を感じる。
- * 子ども食堂については、実施している9つ全て中止したが、みんなが困っているこんな時だからこそ動きたいという方もたくさんいた。また、学童保育所については、昨年3月に学校休校があつて、朝から受け入れをしたが、学校が元に戻ると登録者大きく減少した。理由は2つあり、「子どもが一人で留守番できることがわかった」ということと「母親の失業」によるものであった。

○協働の取組

- * 緊急事態宣言下で、協働というものが急激に進んだ部分もあると感じている。例えば、ICTに弱い高齢者に対して、学生がスマホ教室をするといったNPOと大学が連携した取組や、フードパントリーや子ども食堂の支援で企業が近所の八百屋などと連携した取組も実施されている。

○オンライン化の現状・限界

- * ワクチン接種の予約について、周りの方に話を聞くとネットを使って自分で予約できないため、子どもに予約してもらったという話をよく聞く。デジタルデバイドを解決していくのは時間もかかるし、とても難しい問題であると感じた。

*ここに集まった皆さんが普段関わっている世界というのは、人との繋がりを大事にする活動であり、そういった場所ではオンラインだけでは成り立たないということがよく分かった。

*コロナ禍にあっても人とのつながりを持った生活をしたいと思っている人が多くいることが分かった。自粛で家にいるのが嫌になったという声も聞いたりするので、人と人との交流はとても大事だと感じた。

*対面でのコミュニケーションを ICT で代替するのには限界があり、人と人が接することは絶対に必要だと思う。Zoom などを使いこなせている周りの方々に聞いても同様の意見である。

○今後の議論の方向性

*地域に開かれた繋がりという言葉が出てきたが、そういうものを目指していくにはどうしたらいいか、今失われているその場所をどう再生していけばいいのかというのが、考えていかなければならないビジョンだと思う。

*審議会として「ポストコロナ社会の新たな生活スタイル」について提案することになっているが、未だにコロナ禍が続いている中、ウィズコロナとの関係性を踏まえて考える必要がある。

*地域の人たちが困難のなかで様々な工夫をしている。各種団体等のリーダーがどんなところで迷ったか、苦しんだか、こういう選択をしたとかという経験も蓄積してきている。将来、ポストコロナになっても使えるような工夫・経験が存在しているので、それを集めて、蓄積するようつもりで作っていけば、それ自体が貴重な報告になっていくと思う。人々の工夫を学ぶというつもりでまとめていけばいいと思う。